紹介

浜川仁訳・解説

『クリフォード訪琉日記』

一八一六年、英アマースト使節団を北京へと送り届けた軍艦二隻（アルセスト号・ライラ号）は、待合中の時間を使い朝鮮と琉球を訪問した。その際の見聞をライラ号艦長バジル＝ホールがまとめ出版したものが、『朝鮮・琉球航海記』（春名徹訳／岩波文庫）である（以下『航海記』と略）。いささかロマンティシズムが過ぎるきらいがありつつも、琉球に住む人々と民俗風習を、詳細に生き生きと描き出した当旅行記は、出版後すぐにヨーロッパでベストセラーとなり、当時の琉球王国を窺い知る貴重な史料として、現在日本でも広く親しまれている。

本書『クリフォード訪琉日記』はライラ号に乗船していた海軍士官H・J・クリフォードの日記の内、琉球滞在部分を訳出したものである。日記の原本は国立英国海軍博物館（ポーツマス）に所蔵されている。筆者のクリフォードは琉球滞在中、琉球語彙の収集を自身の任務となして、積極的に現地の人々と交流し、記録を残した。ホール自身、『航海記』を執筆するにあたりクリフォードの日記を参照していたと明言している。本書はいわば、その一次史料にあたるとでも言えようか。なお本書は初刊行の新出史料であり、科研事業「交錯するまなざし――琉球・沖縄をめぐる欧米のトラベルライティングの総合的研究」（代表・山里勝己、二〇一二-二〇一五）による研究成果のひとつとなっている。以下簡単に、本書の特徴を見てみよう。

日記は一八一六年九月二十一日より十月二十七日までの一ヵ月あまりにわたる。艦隊が那覇に入港したのは九月十六日であり、その五日後から出港の日まで、ほぼ毎日のペースで日記は綴られている。記事中の出来事は多く『航海記』と重複するが、『航海記』がいわば艦隊の公式な遠征記録として、刊行を意識した客観的記述がなされているのに対し、本書はクリフォード個人の日記として、彼が人々との交流の中で受けた印象や湧き出た感情が実にのびのびと気兼ねなく、書かれている。

日記の始まりからして、上陸許可が下りない憂さ晴らしに望遠鏡で陸の女性たちを覗き見する記事となっている。神秘的な異国の異性に（琉球側が徹底的に女性を西洋人の前から隠したことも相まって）余程興味を魅かれたのだろうか、クリフォードは何度も来船する役人たちにその妻子について質問し、運よく街中で女性の姿をみかけたら、その服装や体型まで――「魅力的」という言葉を添えて――詳細に記録するのであった。

クリフォードはまた、琉球の役人たちと艦隊中で最も深く、親しくなった人であろう。日記中の少なからぬ部分が、彼と琉球人との会話内容に割かれている。現地人と琉球語・英語を互いに教えあったクリフォードは、滞在後半には通訳を介さずとも意思疎通が可能となり、琉球人との様々な話題の中には『航海記』に記されていないもの（前述の琉球女性についてや、暦や時計の話など）も多く、興味が尽きない。

さらに、本文に劣らず本書の魅力を高めているのは、巻頭に配された挿絵の数々である。ラフなスケッチながら鮮やかなこれらの絵は、艦隊の船員らの手によるもので

あり、当時の琉球人の面影を良く伝えてくれている。

本書は一般書の趣が強く、平易な訳文で、注釈や巻末解説なども読者に研究者を意識した仔細を極めたものとは言えない。しかしながら、全書を通して表れてくるものは、クリフォードという個人を通したリアルな琉球の情景であり、一八一六年当時の琉球を覆っていた空気がそのまま詰め込まれたような臨場感を与えてくれる。『航海記』と併読することで、より鮮明に当時の琉球をイメージすることが可能となるだろう。琉球研究に携わるすべての方に広く紹介したい。

（四六判　二六四頁　二〇一五年一〇月　不二出版　税別一八〇〇円）

（張子康　京都大学大学院文学研究科　修士課程）

会　告

去る六月十六日に開催されました史学研究会理事会・評議員会におきまして左記の事項が可決、承認されましたのでご報告申し上げます。

記

一、平成二十七年度決算報告
一、平成二十八年度予算案
一、役員の交替

1、退任

理事長　永井　和
常務理事　上島　享（↓理事）
　　久保一之（↓評議員）
理　事　岡村秀典（↓監事）
　　川島昭夫、服部良久
　　松浦　茂、水野直樹
監　事　小関　隆（↓理事）
評議員　小野澤透（↓常務理事）
　　高嶋　航（↓常務理事）
　　矢木　毅（↓理事）
　　江川　温、檀上　寛
　　森田憲司、山内昭人
編集委員　柴田陽一、藤井翔太
　　藤井律之、山崎　岳
　　山田　徹
庶務委員　内山隆彦、小堀慎悟
　　都留俊太郎、仲田志織
　　森下　達、山内桜子

2、新任

理事長　井谷鋼造（↑理事）
常務理事　小野澤透（↑評議員）
　　高嶋　航（↑評議員）
理　事　上島　享（↑常務理事）
　　小関　隆（↑監事）
　　合田昌史
　　矢木　毅（↑評議員）
監　事　岡村秀典（↑理事）
評議員　久保一之（↑常務理事）
　　上垣　豊、太田　出
　　下垣仁志、角谷常子
　　藤永　壯
編集委員　網島　聖、黒羽亮太
　　谷口良生、土口史記
庶務委員　石野達也、小山田真帆
　　桑林賢治、谷　雪妮
　　後藤　陸、宮崎雄史郎